岩手県奥州市江刺区梁川の薩摩奴踊歌と
その形成過程に関する基礎的考察

飯島　一彦

獨協大学国際教養学部
マテシス・ウニウェルサリス　第十三巻　第二号
二〇一二年三月三十一日　発行

岩手県奥州市江刺区梁川の薩摩奴踊歌と
その形成過程に関する基礎的考察

飯島　一彦

一　はじめに

平成23年11月6日、岩手県奥州市江刺区広瀬字軽石にある軽石北部集落センターにて、口内薩摩奴踊保存会、梁川西沢目薩摩奴踊り保存会、軽石薩摩奴踊保存会による三地区薩摩奴踊交流会が開催された。この三保存会は、かつて存在した旧江刺郡（平安時代の建郡以来ほぼ郡域は変わらず、明治期の合併によって一町十二村になった）の、北部三箇村と称された福岡村（現北上市口内）梁川村（現奥州市江刺区梁川）広瀬村（現奥州市江刺区広瀬）それぞれに残る薩摩奴踊りの保存伝承に努めており、また互いに交流を深めて研鑽を積む意味で年に一回各保存会持ち回りで交流会を開いている。その際筆者は「奴踊りと薩摩奴踊り」という題で簡単な講演をした。

薩摩奴踊りは『岩手県の民俗芸能・岩手県民俗芸能緊急調査報告書』（岩手県文化財調査報告書第100集、平成9年3月、岩手県教育委員会）によれば、花巻市2、北上市4、江刺市3、紫波町1と県内に11箇所伝承されている民俗芸能であるが、そのうちの半数ほどは休止状態にあり、岩手県に伝承されている民俗芸能としては伝承数は多い方ではない。かつてはもっと沢山の伝承があったようである。奥州市江刺区広瀬でも他に歌書・西風の二箇所、梁川でも東沢目（長京）に一箇所あったことが明らかだが、すでに伝承は途絶えている。それにしても、県内の他

の民俗芸能と比較して、もともと伝承数が多かったとは言えないだろう。さらに、豊臣秀吉の朝鮮出兵と関わりがあると説くその由来から見て、西日本からの伝承が考えられるにもかかわらず、各地方に近縁の民俗芸能を見いだし難いのである。

奴踊りと称される、下級武士の扮装で歌い踊られる民俗芸能は、南は鹿児島県沖永良部島から北は青森県五所川原市まで、日本各地に多数存在する。民俗芸能研究では通例これらを近世の風流、ないし小歌踊りという分野に属せしめている。しかし、この岩手県中部、現北上市を中心とする狭い地域、旧南部藩と伊達藩との藩境を挟んで点在する「薩摩奴踊り」と称される民俗芸能は多くの点で他の奴踊りとの差異を指摘できる。特に薩摩奴踊りは二本差しで自ら歌いながら輪踊りをするのだが、その扮装はいわゆる奴踊りが褌を強調する共奴（大名行列の奴）であるのとはかなり違う。なかでも、その歌詞が、主なものがすべて六方言葉（奴言葉）で表現されていることは特徴的で、そのうちのごく少数は歌舞伎踊りの歌謡として江戸時代の記録が残るが、研究者の中にはそこから元は歌舞伎舞踊であるなどとする説もある。しかし、管見ながら該当する歌舞伎歌謡なり歌舞伎舞踊をまとまって見出すことは出来ない。とにかく、色々な点でまだ考えなければならないことが沢山ある、とそんな話をしたのであった。

ところでその席で、梁川西沢目薩摩奴踊り保存会の菊池喜美雄氏より、同会が現在歌っている薩摩奴踊り歌の歌詞がまとめられている本（通例では原本は「巻物」と呼ばれて庭元と称する世話人方に預けられ、通常拝見するのが難しい）の写しのさらに複写というものを、ご好意で見せていただくことができた（図版①～④参照）。奥州市江刺区梁川字西沢目（久田）の薩摩奴踊り歌の歌詞は、今まで公になったことがない。そこで、ここに翻刻して示し、加えて薩摩奴踊りとその歌詞、および構成に対する基礎的な考察を加える。

二　『梁川西沢目薩摩奴踊歌』の翻刻

翻刻に当たって

本書（内題など一切ないので、ここでは仮に『梁川西沢目薩摩奴踊歌』としておく）は、昭和32年に書写されたものの複写で、横型の小冊子である。本来は毛筆で記されているものだが、日常の練習のために書き加えた鉛筆書きなどの振り仮名、頁番号等が付け加えられているようである。原本を直接見たわけではないので、体裁・題名等詳細はわからない。

それらを踏まえた上で、左のような方針で翻刻した。

一　旧字体などはすべて通行の字体にして翻刻した。
一　後から付け加えられたとおぼしき振り仮名は一切省いた。
一　後から付け加えられたとおぼしき頁番号だけは、便宜のために、その頁の最後に示した。
一　各歌の前には大きく歌括弧がつけられるが、一ヶ所付け忘れている。

翻刻『梁川西沢目薩摩奴踊歌』

奴子ノ起因

今ヨリ凡ソ三百八十五年前文禄元年
紀元二千二百五十二年太閤秀吉公

三十万ノ武将ヲ擧ケ加藤清正小西
行長ヲ先鋒トシ朝鮮ヲ征服スル、儀ナリ
奈良ノ都ニ於テ観兵式ヲ擧行ス其ノあと、名
所三笠山ノ月見、竜田川辺ノ紅葉狩リヲ
行ヘ祝宴（送功ノ意）ヲ催シヲリ其の時
奴子躍ヘ遊バサル然シテ愈々渡航
シ自ラ臨テ指揮シ所々ニ転戦シ戦
ヘバ必ズ勝チ遂ニ王城ヲ陥レ目的
ヲ達シ帰国ナサレタリ此ノ時凱旋式
ヲ津ノ国　天下茶屋ニ於テ行ヘ
給フ此ノ時國々ノ諸大名相寄リ
祝宴ヲ開催セラル家来下
部ニ至ル迄大イニ喜ビ銘々御祝儀
ノ爲メ諸藝ヲ尽シタリト云フ此ノ時
渡鮮祝ノ際躍タル奴子舞ヲ
思ヘ出シ長柄ヲ振テ皆躍
リ甚大ニシテ幕ヲ閉チサセ給フ
公ハ天下ヲ納メ外征ノ目的ヲ達
シ御年六十三才ニシテトウ〳〵ムナ

」1

シク成ラレマシタ此ノ奴子踊ハ
公ノ宴ニ御始メニナリ大閤様ヲ
しのびツ、特世ニ傳タワリタルモノナリ
大閤様ハ尾張ノ國愛知郡中
村ト云フ農家ニ生レ十六才迄ハ日吉
丸ト云ヘ亦木ノ下藤吉郎トモ
呼バレマシタ十八才ヨリ織田信長ニ仕
ヘテ戦役ニ服シ智勇他ニ勝
レ次第ニ重ク用ヘラレ遂ニ天下ノ人
トナリタル御方ニテ御座イマス
（以上中略書ナリ）

昭和三十二年
旧八月十日
以下歌集

」2

入　葉
〈鳥ならば〳〵
のふほ、おほい

さまのあたりに
　巣をかけて
　　のふほゝおほい
　何時も聞たい
様の御声その声
　やれかわい
さんまおい

」3

手　踊

〈何時も笹野に
しぎりん　松山
　岩しゃんトせ　ハア唐も
　　日本の大和も笹野
　上なる露のうぎやうじゃと
世間では専ら
　　岩しやらせ
　さあさおしゃそりや
　　そんたいすはい
　ソーレハ　ハッ　ハッ

」4

〈浅草のえんま王に
酒手三文はたられたハァ
　六道銭とてためた
　　をいたるさし儘
　　さん出した
　さあさおしやそのしやつらえー
　　ソーレハ　ハッ　ハッ

〈おらが若い時
　栗のいがさいくのんだハァ
　今は年より〳〵
　　てんとひげに
　　たおされた
　いや弁慶たんべはへ
　　ソーレハ　ハッ　ハッ

〈こゝえ持ちて来なさアる
　猫の皮の笠ゆたんハァ
　三筋の糸をば〳〵

」5

強きこきひっぱり
いたちの皮だんべえ
　さあさおしゃそりや
そんだいすわへ
　ソーレハ　ハッ　ハッ
」6

〈さはちはじふらめけども
　底心こころは佛ださ
ハハとにかくしやつはしやばに
　えんずくさはちに
気がついた　さあさ
　おしやそりや
　　そんだいすわい
　　ソーレハ　ハッ　ハッ
」7

〈桐のまないたに
　打ちづなさしかけた
ハアぢ打ちの熊手で〳〵
からり引かけた

　イヤスッスノスいや弁慶
だんべはえ
ソーレハ　ハッ　ハッ
」8

〈思いなほして元のがゝ様
　寄り合さハァ
元に根もあり葉もあり
天と幼ななじみじやと
　世間ではわ専ら岩しやらせ
さあさおしやそりや
　そんだいすはへ
　ソーレハ　ハッ　ハッ
」9

〈四角五角ははやれば
　細になはやるさハァ
今は一角など　一角など
　どうせ世間から
専ら岩しやらせ　さあさ
　おしやそりや　そんだいすはへ

ソーレハ　ハッ　ハッ

〈思かければ荒岩などを
　ふんごしたハァまして
板どの七ッ八ッ枚は何の
　弁慶だんべわへ

〈地こぶのてへつから
　星の親父はづほのけた
ハァろうしの卵を〳〵を
（火事）
ごしやりふんごした
イヤデッチメ
目玉のさやはどせ
ソーレハ　ハッ　ハッ」10

〈当世早りし石貝浪の
　落葉ゑ
（つはりとぬき出して

御めんなれお宿は何こ
　山の殿）
いやすっしのし　いや
弁慶だんべわへ」11

〈くされ木のふしに
　まさ切りそへて
こちや持ってこハァ
　ふうさき〳〵
ほんとゆぶして
　若いしうに交わるべ
さあさ　見事の
　さつらえー
ソーレハ　ハッ　ハッ」12

引　葉

〈きりぎりす〳〵
　のふほゝおほい
木の葉の下でも

鳴きもせで
　のふほゝおほい
夜明けのみんだれ神よ
　泉みますよ
　　のふほゝおほい
　　シー　」13

（余白）

屋　柄　誉　」14

〈参りて屋柄を見申せば
　　のふほゝおい
　南おもてに建おかる
　　のふほゝおい
投　草　誉
〈白金御盆の其中に
　のふほゝおほへ
玉と黄金を積重ね
　のふほゝおほほへ

上ァげて戴く　」15
　我等連れ
　　のふほゝおほゝへ
御　酒　誉
〈是の御酒をなんと
　食べたく連れ〳〵よ
　のふほゝふへ泉古酒
加賀の菊酒
　しんきりよ
やァれ可愛へさんまおほへ　」16
御　宮　誉
〈参りて御宮を見申せば
　のふほゝおふい
なぎしたる木は
　紫黄金
　のふほゝおふへ

鳥　居　誉

〽参りて鳥居を見申せば
　のふほゝおふへ
白金柱に黄金吹き
　のふほゝおふへ
御　庭　誉

〽参りて御庭を見申せば
　るりの砂子はかゞやく
　のふほゝおふへ
門　誉

〽参りて御門を見申せば
　ひたのたくみがたておかる
　　のふほゝおほへ
墓　印　誉

恋しき人の墓印
　参りておかめば
ミダアウ浄土へ
　のふほゝおほへ
道　具　躍

〽思ふとて〳〵
　思はのふりして
色目も出すなかの様よ
　のふほゝおほへ

〽五尺手拭〳〵
　御や誠五尺手拭
中染て〳〵おれ
　にくりうよりや御や
誠おれにくりようよりや
宿にをけ宿がよければ御や誠
宿がよければ名もたゝず
　〳〵

〽やらお目出度や
御舟遊びはにっち〳〵
こばやの何時の間に
御先揃へて川口深川
隅田川らでどんびよす
お揃へやっとろ〳〵　〳〵
やっとろやっと柳桜

をこぎまぜて
すゑん仲間の事
なるにおさか〳〵
盃よえこの〳〵〳〵〳〵な
さるにそ此かでせんとの
こんたにはすぎりん
松山ハア　ざゞざゝ
良ひこの〳〵〳〵この
舟は君はのんかんかおごご
〳〵〳〵船乗りのけてのこ
んここんでなへよりのほゝ
〳〵〳〵のほゝでやる
〳〵やら先の月の十八日に
清水参りとておさかさ」21
かずきまさかさのさかさかで
良いや若いしうにはたと
会ふたな我れかたてたる様
なればぬかてわきにしや
がんだぬき代は一寸先は」22

一寸口はあじがよい
命は障子ご御顔は
ねこぶははしと喰ひつき
すめつきしんまら
しようかのんかかんか
若いせんしのぼんぼハアざゝざ」23
仙台しのほかけほう
しの五文としえし
は千〇寺菊岩
いこの〳〵したばんで
なえよりのほゝ〳〵〳〵
でやアる
〳〵やら五間橋の丸木
の其のや峠に走り上りて
ねざさの中を
押上げて」24
見たれば大松はかい事
やっと云ふてかと云ふて
見たれば山柄こ柄ぬか

くめずその御めこえ
しのやつしたがはのすゞ
からはさやずる
はひさ〳〵〳〵や
そんだい〳〵〳〵や
火先はひんざさらほんまよ
せよせよせんこもなにもざら
〳〵すゞからはひんから
りんちんちよぢ〳〵と
さへずるところをさえとり
差しの斉蔵防は
ねりよりはへより自由
に差しておっとたなへより
のふほゝ〳〵〳〵でやアる
〳〵ござれくやれこれ
川の瀬にござれ三日月
なりにソレハ何の如くじや
ヨエ〳〵〳〵ノヨイ
〳〵伊勢しの木船で

」26

やれこれ　さぐりたへ
とはおしやるがさぐ
らばさぐれハッハ
川の瀬でさぐれ
ヨイ〳〵ノヨイ
（五尺手拭の前にやる）
〳〵旅のくたひれじや
舟唄でやりませう
〳〵夜明のみんだり神よ
いづみますよう
のふほゝ　おほへ

」27

終

」28

三　薩摩奴踊りと民俗芸能の伝承の様態

筆者はかつて奥州市江刺区広瀬字軽石の軽石薩摩奴踊り歌の歌詞について注釈を試みたことがある（『歌のちか

ら―岩手県旧江刺郡の民俗歌謡資料と研究』「薩摩奴踊りについて―その芸能と歌詞―」平成15年瑞木書房）。その結果わかったことは、中心部分の歌詞がすべていわゆる六方言葉（奴言葉）で表現されていて、他に類を見ないことである。

詳細はそちらに譲るが、軽石薩摩奴踊りは口内から、口内は北上市立花から伝搬したことがはっきりしている。梁川薩摩奴踊りがどこから伝承を受けたかは定かではないが、芸態は現在の立花の薩摩奴踊りに似ている部分も多い。それに対して口内や軽石は立花と似ていない部分も多い。そのような差異が一体どのような理由によって生じたのかはまだよく分かっていない。

しかし、薩摩奴踊りだけでなく、岩手県に様々に存在する民俗芸能、特に鹿躍りや田植え踊りなどについては、膨大な伝承例を持っていながらそれぞれが非常に違う芸態を持っていたり、踊りぶりが違っているというのは、単に伝承の過程で失われたり自然に変化して行くというよりは、特に岩手県のように民俗芸能伝承の濃い地域では、他地域の類似の芸能との差別化を図るために、意図的に変化させていった可能性が高いのではないかと考えている。差別化が明確で、それが素晴らしい表現であれば、それを誇ったに違いなく、むろん地元で喜ばれたはずである。ただし、その変化の様子を跡付けるのは大変難しく、現在までそれを明らかにした例はない。しかし、薩摩奴踊りではもしかしたらそれが可能かもしれないと思われる。本稿はそのための基礎作業である。

四　奥州市江刺区梁川西沢目の薩摩奴踊り歌について

梁川の薩摩奴踊りについてはかつて本田安次が「江刺市梁川の奴踊　岩手縣江刺市梁川字長京」として報告している（『日本の民俗藝能Ⅱ　田楽・風流二』昭和42年、木耳社）。ただし、これは今回報告する西沢目の薩摩奴踊りの隣の地区に、かつて伝承されていたものの明治八年の書留の写し（現地から本田氏に送られたものであり、本田氏が現地で確認したわけではない）であり、非常に近い隣り合った地区に伝承されていたにもかかわらず、歌詞そのものの出入り、順番の違いなど、看過しがたい違いが生じている。むろん、書写年代も違い、芸能伝承の組（江刺地方では民俗芸能の伝承は同年代のものが集まって作る「組」が伝承主体となることが多い）の世代から言えば少なくとも三代は違っているはずであるから、単純に言えば年代的変化も大いに考えられる。しかし、実際に民俗芸能伝承の現場に立ってみれば、古典芸能と同様に非常に厳しい伝承活動が続けられているのを見ることが出来る。それゆえ意図的な変化を考えざるを得ないのであるが、それを具体的に跡付けるのは前述のごとく難しい。ただ、年代的・地域的に違う伝承を持つ同種の芸能を比較し、差異を明らかにすることで、ある程度の変化の相を明らかに出来るのではないかと思う。特に薩摩奴踊りは伝承例が少ないので比較がしやすいはずである。

実は薩摩奴踊り歌の歌詞は江戸時代から書き留められていた。三河国出身の菅江真澄（宝暦四年（１７５４）～文政十二年（１８２９））が文化六年（１８０９）頃までに、それまでの三十年間の旅の中で記録した東日本各地の民俗歌謡をまとめた『鄙廼一曲（ひなのひとふし）』には、「南部　稗貫　和賀　両郡　神事　奴踊唱歌」として十七首が記載されている。

また明治時代になって文部省が各県に資料の提出を求め、その結果を大正3年に発刊した『俚謡集』（文部省編）には「奴歌」として江刺郡の薩摩奴踊歌が二十九首報告されている。

さらに現代になっては、前述の『日本の民俗藝能Ⅱ　田楽・風流二』に、梁川東沢目の薩摩奴踊歌が二十首、同年刊の『東北民謡集　岩手縣』（武田忠一郎著、日本放送出版協会、昭和42年）に、「江刺市広瀬字平地方」のものとして、実は軽石薩摩奴踊り歌（歌い手の氏名から知られる）が十一首、「梁川奴踊」が六首記載されている。

その他に右に翻刻した『梁川西沢目薩摩奴踊歌』は三一首を数え、『歌のちから』にて注釈を加えた軽石薩摩奴踊歌（軽石に伝わる『軽石薩摩奴踊　極意並歌詞記傳』明治43年に口内から伝承を受けたときの巻物を書写したも

の）の伝承歌数は四十首に上る。

これらの有様を概観・理解するために、以下に比較して示してみる。最上段に『梁川西沢目薩摩奴踊歌』をおいて、記載された曲が他の記録に記されているか否かを、対比して示してある。直下に『日本の民俗藝能Ⅱ　田楽・風流一』で示された東沢目の「薩摩奴踊歌」、その下に『俚謡集』所載の「奴歌」、その下に『鄙廼一曲』（岩波新古典大系所載）の「奴踊唱歌」、最下段に「軽石薩摩奴踊歌」を示してある。『東北民謡集』所載のものは『軽石薩摩奴踊　極意並歌詞記傳』の内容と完全に重なるので割愛した。

なお、所載の順番にも意味があると考えたので、各歌に記載順に筆者が付した番号を用いて比較した。各歌にもともと歌番号が附されているのは岩波新古典大系における『鄙廼一曲』の注釈だけで、それについてはその番号に従った。その他については、筆者が付した番号である。○が付いているのは同歌が存在するという意味、番号は掲載順番号、1から始まる。ただし、『鄙廼一曲』は281番から始まる。×は『梁川西沢目薩摩奴踊歌』所載の歌を記載していないという意味である。

ただ、同じ歌と言っても記載上の表記はかなり違っている。たとえば、一番最初の曲である入葉は、今回翻刻した『梁川西沢目薩摩奴踊歌』では

〻鳥ならば〳〵
　のふほゝおほい
さまのあたりに
　巣をかけて
　　のふほゝおほい
何時も聞たい
　様の御声その声
やれかわい
　さんまおい

となっているが、『鄙廼一曲』では

281　鳥ならば〳〵　様のあたりに巣をかけて　いつもきん聞たや　様の御声　その声さまの　我が中　ずつと聞たや　しんき

となり、『俚謡集』では、

12　鳥ならばさまのあたりに巣をかけて、何時もきゝたや、ヤイサマ、お聲其聲。ノホホホンホホサン、ソリヤサー〳〵。

であり、東沢目薩摩奴踊歌では

1　一、鳥ならば〳〵　ノーホホ、、エソレハ　さまのあたりに巣をかけて　ノーホ、、エ　いつも聞きたや様のおん聲　その聲ヤーレ　かわいさんまオーエ

となっている。これが一番歌数の多い軽石薩摩奴踊歌では、

1　とりならば　とりならば
　ノーホホホン　アーソレハハハ
さまのあたりで　すをかけて
　ノーホホホン　アーソレハハハ
いつもきんきぎたや
さまのおんこえ　そのこえ
ヤーレかわえさんまおえ　アーソレハハハ
さまのわがなか
すっときれたや　しんきよ
ヤーレかわえさんまおえ　アーソレハハハ

と、すべて平仮名で表記される。一見で明らかになるが、同じ曲と言っても細かいところではかなり違っている。が、かなり緩やかに見て本来は同じ歌であったろうと考え、同歌が存在するという意味で○をつけたのである。ただし、たとえば冒頭部だけが同じであとはずいぶん違う等という場合は△をつけておいた。

○　薩摩奴踊歌掲載曲目比較表

『梁川西沢目薩摩奴踊歌』S32	東沢目 M8	俚謡集 T3	鄙廼一曲 文化6	軽石 M43
1　鳥ならば…	○1	○12	○281	○1
2　何時も笹野に…	○2	○13	○283	○2
3　浅草のえんま王に…	○10	○16	○295	○14
4　おらが若い時…	○6	○17	○287	×
5　こゝえ持ちて来なさアる…	○5	○18	○292	○11
6　さはちはじふらめけども…	○13	○15	○290	○5
7　桐のまないたに…	○7	○21	×	×
8　思いなほして元のが、様…	○3	○24	○288	○4
9　四角五角ははやれば…	○12	○20	○285	○13

10	思かければ荒岩などを…	○ 4	○ 23	○ 291	○ 15
11	地こぶのてへつから…	○ 8	○ 27	○ 296	○ 16
12	当世早りし石貝浪の…	○ 9	○ 14	○ 284	○ 3
13	くされ木のふしに…	○ 11	○ 19	○ 294	○ 12
14	きりぎりす…	○ 14前半	○ 7	○ 297	○ 8
15	参りて屋柄を見申せば…	×	×	×	△ 32
16	白金御盆の真中に…	×	×	×	△ 30
17	是の御酒をなんと…	×	○ 11	×	○ 29
18	参りて御宮を見申せば…	×	×	×	×
19	参りて鳥居を見申せば…	×	×	×	×
20	参りて御庭を見申せば…	×	×	×	×
21	参りて御門を見申せば…	×	○ 29	×	×
22	恋しき人の墓印…	×	○ 1	×	×
23	思ふとて…	○ 14後半	○ 5	○ 282	○ 9
24	五尺手拭…	○ 15後半	×	×	×
25	やらお目出度や…	○ 16	×	×	×
26	やら先の月の十八日に…	○ 17	×	×	×
27	やら五間橋の丸木…	○ 18	×	×	×
28	ござれくやれこれ…	○ 19	×	×	×
29	伊勢しの木船で…	○ 20	×	×	×
30	旅のくたびれじや…	○ 15前半	×	×	×
31	夜明のみんだり神よ…	×	×	×	×

五　薩摩奴踊りの芸能としての成長の痕跡

さてこの表での比較から何がわかるだろうか？

まず第一に上げられるのが、東沢目の薩摩奴踊りとの強い近縁性であろう。西沢目の1～14番歌までを東沢目も共に揃えていることである。ただし、1番歌と14番歌とを同じ位置に置きながら、そこに挟まれた曲目については順番をかなり違えている。なぜこのような同一性と差異を生じているのだろうか？それを解くカギは1番歌が「入葉（入端）」と題され、14番歌が「引葉（引端）」と題されていることである。

これを理解するためには、二つの知識が必要となる。一つは、薩摩奴踊りは、一連の所作（一庭と言う）が「入端」「槍踊」「手踊」「引端」という構成で踊られるという形式を持っているということである。もう一つは、このような民俗芸能の書留、記録というものは、ほぼ、上演順に記されていくのが通例である、ということである。つまり、東沢目と西沢目の薩摩奴踊りは、「入端」「槍踊」「手踊」の一番始めの曲と、「引端」だけを替えずに、残りの「手踊」の曲目の順番だけを大幅に入れ替えて踊られていたのだ。おそらくある種の「工夫」によって、いつの時代からかその順番で踊られるようになったのである。

『鄙廼一曲』も全十七首が281番歌の「鳥ならば」から始まって、297番歌の「きりぎりす」で終わっており、菅江真澄が意識して歌を配列したことを示している。彼が採集したのは「稗貫　和賀」つまり当時の南部藩領のみであり、当時の伊達藩領である江刺・胆沢両郡では奴踊りを見ていないようであるが（この両郡では他の歌を採集している）、おそらく複数見た中で、「鳥ならば」ではじまり「きりぎりす」で終わるという芸態を見て取っていたのであろう。『俚謡集』の記載順にそれが意識されていないのを見れば、両者の差は明確である。

それらから比べると、軽石は歌の番号に規則性がないように感じられる。実はここに問題がある。軽石薩摩奴踊はこの「入端」から始まって「引端」に終わるという一連の所作を「一番庭」「中庭」「三番庭」と三回演じるのが基本となっている。従って、曲目数が圧倒的に増えるのであり、歌番号の整合性も、この比較表では見えにくいのである。つまりこの表に現れているのは、東沢目・西沢目および『鄙廼一曲』に示されたような、一番歌の「鳥ならば」から始まって、14番歌の「きりぎりす」で終わるという、一庭完結型の歌のまとまりである、ということである。となれば、このような一庭完結型の薩摩奴踊が古い形式なのであろうか？

実は筆者はそう考えない。大きな理由は、軽石薩摩奴踊の手踊りの歌で、この表に現れない歌の多くが六方言葉（奴言葉）を用いた歌詞であるからで、つまり、もし後から歌が増加していったとして、それが六方言葉の歌詞である必然性は何も無いし、まして江刺郡周辺で正確な六方言葉がどれほど理解され、それによる表現能力をどれほど獲得していたかと想像すればおのずから解答が出る。そんな歌詞を作れるような人物はいなかったはずである。従って、薩摩奴踊歌は拡大したのではなく、おそらく精選されて一庭にまとめられ、右のような結果になったのであろう。ただし、軽石薩摩奴踊りの形成およびその構成についてはもう少し材料を手に入れてから詳細に論じたい。

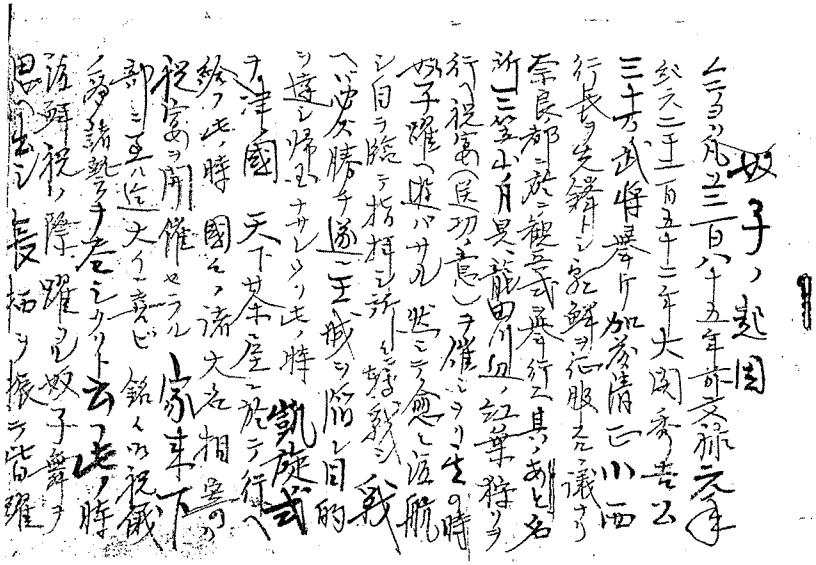
さて、そのような形成の様態を、間接的に別な面から明らかにするのが、15番歌～22番歌である。これらの歌は「誉詞」と呼ばれ、場所場所で対象を誉める歌を唄うのである。それらは仏教と結びつき、盆の供養などでよく歌われるものが多いが、歌詞はまったく六方言葉を用いない。実は「誉詞」は他の剣舞や鹿踊りなどの民俗芸能にも多数存在し、その影響が大きいと考えられる。つまり、「誉詞」は地域で、後に付加された部分である、ということである。付加された理由は、薩摩奴踊りも他の民俗芸能と同様に地域の生活習俗の中で伝承されていく際に、そのような歌を持って機能することが求められたということであろう。民俗芸能は単なる芸能として伝承されては行かない。他の生活習俗と結びついて存在することによって、はじめて伝承が可能になるのである。

西沢目の薩摩奴踊歌の15～22番歌について、東沢目がこの部分を載せていないのはそれをよく表現しているとし

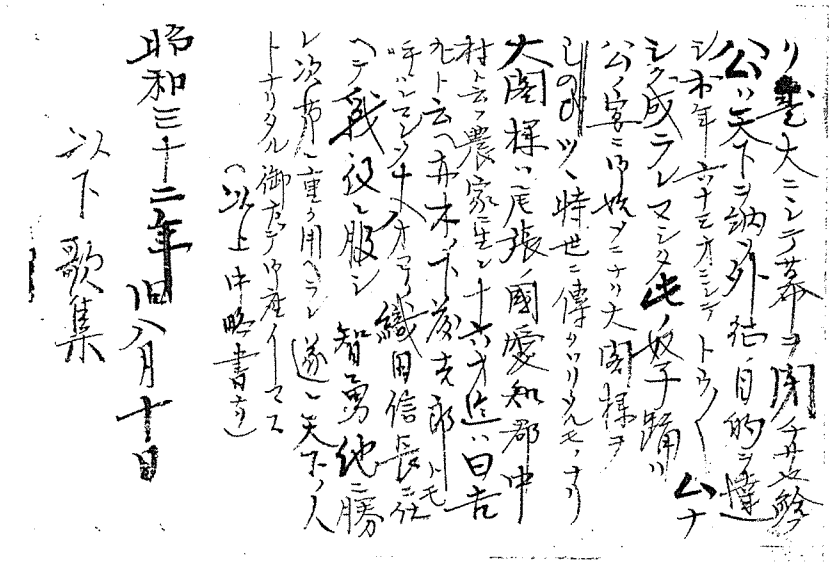
か言いようがない。東沢目ではこれが記録された時点で「誉詞」がまだ付加されてはいなかったか、あるいは書写されたものが本田安次氏に送られる際に意図的に書き落とされたか、どちらかであったろうが、多分、まだ付加されていなかった状態を示していると思われる。というのも、14番歌の「きりぎりす」の後に直接23番歌「思ふとて」が接続している形を取っているからである。実は、この「思ふとて」は、軽石薩摩奴踊りでは中庭の冒頭の「槍踊」の歌として機能しており、また『鄙廼一曲』にも記載されている古い歌である。東沢目では一庭の「引端」として機能させて残していたのではないだろうか。つまり「誉詞」は東沢目における奴踊りの書留に入る余地がなかったということである。

またさらにそこから後に「五尺手拭」という歌詞があるが、これが江戸時代の流行り歌であることは言うまでもない。24番歌以降は、まったく庶民の娯楽として流行り歌を取り込んだ形跡が濃厚である。それを持っているのが東沢目・西沢目のものだけというのも、ある時期に、特定の地域で付加されたことを示していよう。

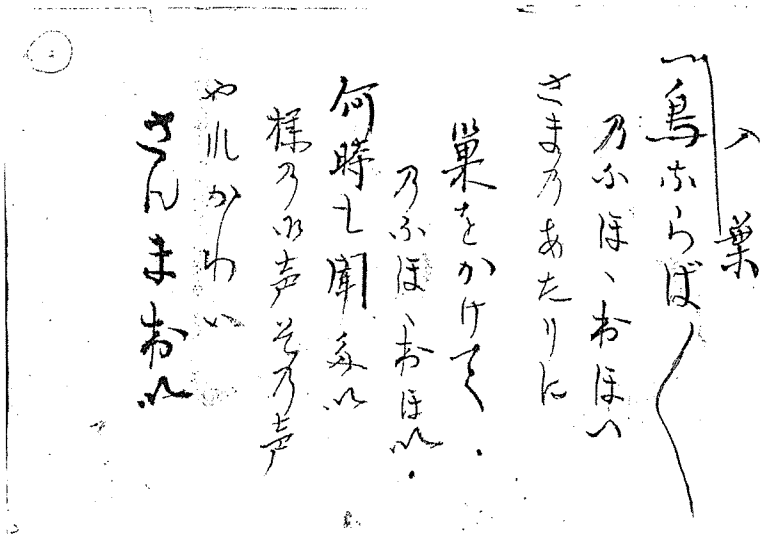
このように、西沢目の薩摩奴踊歌を東沢目の伝承や他の記録と付き合わせてみると、全体として1番歌～14番歌＋23番歌までの一庭としてのまとまりを持つ部分、15番歌～22番歌までが「誉詞」として後に付加された部分、さらに24番歌以降の付加された部分という三つの部分に截然として区分されることがわかる。これが、民俗芸能として薩摩奴踊りが成長してきた一つの道筋を濃厚に示していると思われるのである。



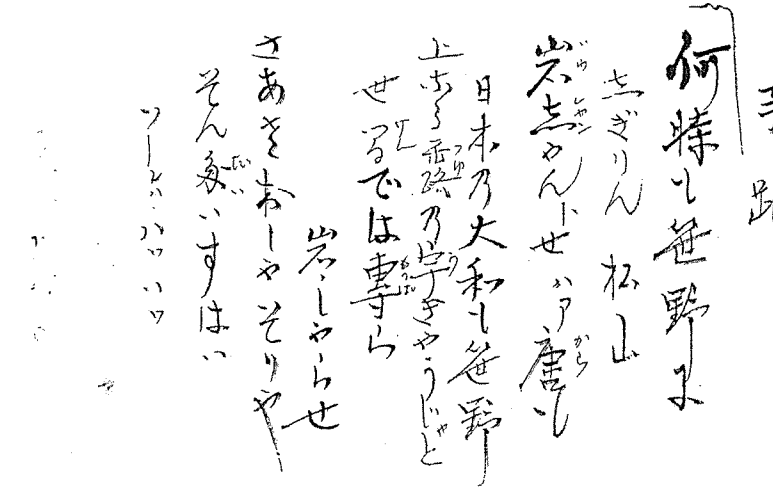
1頁



2頁



3頁



4頁

A comparative study about the old libretto of folk performance "Satsuma-Yakko-Odori" of Yanagawa, Esashi-ku, Oshu-city, Iwate pref. Japan, with neighboring area

IIJIMA Kazuhiko

"Satsuma-Yakko-Odori" is an old folk performance of Iwate pref. in Japan.

The author was given a copy of the libretto from Mr. Kimio Kikuchi as president of conservation party for "Nishi-Sawame Satsuma-Yakko-Odori" last year. It was an unpublished text. So I want to print it.

And neighboring area of Nishi-Sawame has some similar performances, like "Higashi-Sawame-Satsuma-Yakko-Odori", "Karuishi-Satsuma-Yakko-Odori". But they have little differences mutually.

Moreover there're old notes of texts of "Satsuma-Yakko-Odori" wrote down at Meiji era or Edo era.

The comparison of these texts shows a representative growth and development of "Nishi-Sawame Satsuma-Yakko-Odori".